

Ed.ベンだより



〒242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話／Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL <http://edventure.jp/>

「すたんどばいみー」と「ライオン学校」を紹介します

当事者団体「すたんどばいみー」は、14年前に立ち上がった、外国人の若者たちによる外国人の子ども支援の団体です。「スタンドバイミー」とカタカナで書かないのも、「外国人の子どもたちは、カタカナを読むのが苦手だから・・・」という理由でひらがな表記になったと聞きました。今回の Ed.ベンだよりでは、関連協力団体である「すたんどばいみー」と「ライオン学校」を取り上げて紹介します。

当事者団体・・・「すたんどばいみー」

日本で生活する外国人の子どもや若者たちは、様々な「不都合」や「うまくいかないこと」「理不尽なこと」に日常の中で出会いながら生活しています。それは、個人的な出来事の中でのことであっても、実はその裏には、社会制度や社会構造に原因があったり、日本人からのまなざしが問題であったり・・・と、複雑でなかなか解決が難しい「状況」が隠れています。外国人の子どもや若者たちが感じる一つひとつの痛みや生きづらさを、その状況を作り出している日本人の側から理解することは、ほぼ不可能なことに違いありません。その一方で、外国人の子どもや若者たちにしてみれば、それらを言葉に整理して、「主張」していくことはこれまた難しく、「受容しながら生きる」なかで、痛みや生きづらさを無意識に引き受けていくことになるのが現実です。

こうした現実「異議」を唱え、同じ地域に生きる外国人として、若者たちがお互いを支えあう行動こそが、当事者団体としての活動なのです。ですから、その活動は、外国人としての葛藤や混乱の連続に満ちています。出口の見えない現実「出口」をつくりだそうとしているのですから当然のこと！そのため、すたんどばいみーのメンバーは理念を語る前に行動します。目の前の事実に対して、とても具体的な取り組みを展開していくのです。小学生や中学生の学習支援。中三の進路指導。集団のなかで自信を育てるために準備された様々な行事。キャンプ。母国語教室。・・・気になる子どもの家には家庭訪問もします。こうした取り組みの底には、一人ひとりの子どものことをみんなで考え、みんなで支える姿勢が貫かれています。



5月9日、10日の土日に「やまと市民まつり」が開催されましたが、引地台公園の会場で、すたんどばいみーは焼きそばとフランクフルトのお店を今年も出店しました。活動費の足しにするために1000食を目標に、大きな声をあげて、汗をかいて250円の焼きそばと100円のフランクフルトを一生懸命に売ります。注目して欲しいのはテントの中の活気です。今はもう社会人として立派に活躍しているすたんどばいみー立ち上げのメンバーから、現在中学生の子どもまで、声を掛け合い、くるくるとよく働いています。そんな中に日本人の支援者も混じります。もちろん、焼きそばを売りながらも当事者団体としてのアピールも忘れません。お店の横には、活動紹介の看板が立てられ、焼きそばにはミニチラシが添えられています。しかし、どれくらいの人々がそれらを読んで

すたんどばいみーとは

外国人の子どもたちが集まって自治的な運営を行っている団体です。主に小・中・高校生の外国人児童・生徒を対象とした勉強支援を行っています。設立は2001年5月で、当初のスタッフは4～5人、児童・生徒は12人くらいでした。現在はスタッフが20～25人、児童・生徒は100人を超えています。今までにこの団体に参加した人数は約、650人以上になります。参加している児童・生徒は、移住前から大学生まで幅広い年齢層にわたっており、国もインドネシア（バトナム・カンボジア・ラオス）、中国、南米（アルゼンチン・ペルー・ブラジル・コロンビア・ボリビア）など様々です。活動場所は主に、大和市中心林間学校校舎開放スペースです。

でくれているかは少し心もとなく思ったりもします。読まれることなく捨てられてしまっているのではないかな……。でも、すたんどばいみーの若者たちは気にしません。なぜなら、もともと自分たちの痛みや生きづらさを簡単に理解されるとは思っていないからです。日本人に理解してもらうことより、外国人同士で支えあって生きることを選択した当事者団体なのですから・・・。

<ミニチラシ>

実は、私たちEd.ベンチャーは、「すたんどばいみー」を支援していた日本

人が中心となって立ち上げた教育支援のNPOです。当事者団体として日本人の支援者からどんどん自立していく「すたんどばいみー」を見ながら、日本人は日本人がやるべきことを始めよう、という思いで誕生したのがE.d.ベンチャーです。私たちは、これからも「すたんどばいみー」のような当事者団体をパートナーとして、外国人の子どもたちへの支援も続けていくつもりです。

震災支援・・・「ライオン学校」

「痛みを理解し共有することはできない。痛みを想像し、そばにただ居つづけること・・・。」そんなことを思いながら、2011年4月から陸前高田市へ、5月半ばからは石巻市へ震災支援として足を運び続けました。(これらの詳細は、『震災支援通信』をHPでご覧下さい。)

石巻市万石浦中学校避難所へは、避難所運営のお手伝いに出向していた神奈川県職員の方から、学習支援の依頼を受けてスタートさせたものでした。しかし、避難所で生活する子どもたちは、学習支援を受け入れるような状況にはありませんでした。子どもたちは『荒れて』いたのです。おとなたちお得意の「一緒に遊んであげる」や「勉強を教えてあげる」は、完全に拒否をされました。子どもたちは、もつとわがままで、破壊的で、鬱屈した衝動に満ちていました。そこには、規範意識も集団性も感じ取ることはできませんでした。言葉を変えれば、極限まで子どもたちは追い詰められていたと言えるかもしれません。大人に対しては、挑戦的な態度をとりながらも独占したがる・・・、物にすぐあたる・・・、すぐ飽きてがんばろうとしない・・・。そんな子どもたちを前に、私たち支援スタッフの一人ひとりが悩み、葛藤していました。「来週は、あの子に何をしてあげたらいいのか」。

こんな状況の中に、現在のライオン学校のスタッフである東京理科大学の学生たちが加わってきたのです。自分たちの子ども時代とのギャップに、きっと苦しんだに違いありません。しかし、かれら・かのじよらは、ついに一步も引かずに、4年という期間、子どもたちの横に居続けたのです。しかもこの2年間は、自分たち学生の手だけでライオン学校という団体を立ち上げ、支援を続けてきました。子どもたちが通う学校の校長先生や担任の先生ともつながりをつくり、子ども一人ひとりの心配をしてきました。ライオン学校のスタッフたちが家庭訪問をすると、その後ろに子どもたちの列ができます。一軒訪れるたびに、その列に一人の子が増えるのです。

ライオン学校の活動も今年の3月でその区切りをつけました。スタッフの皆さん、本当にお疲れ様でした。最後に、万石浦中学校避難所で出会った一人の男の子の作文(現在は中三)を紹介します。

この団体に参加することになったのは、2011年の7月初旬のことだったと思います。当時小学5年生だった私は、友達の手君に「ただで富士山に連れて行ってくれるっていう団体があるんだけど、行く？」と言われ、「ただで富士山に行けるなら、行ってみたいなあ」と思い、さっそく手君と一緒に活動場所へ行ったのが始まりでした。その後、ライオン学校に参加することになり、様々な人や物に出会い、様々な経験をしてきました。

この「ライオン学校」に参加して、一番心に残っている言葉があります。それは、「辛いときは、頑張らない」という言葉です。辛くなったら「自分で何とかしよう」と考えてしまうものですが、どうしても駄目なときは、人を頼ってもいいということです。私はこの団体に参加するまで、学校で人間関係に悩むことがありどうしたらいいのかわからなくなっていました。そんな中ライオン学校に参加したことで、この団体が心の支えとなり、少しずつ「どうしたらいいのか」ということを考える余裕ができました。これからも困難が立ち上がることもあると思いますが、この言葉を胸に生きていこうと思います。

最後に、E.d.ベンチャーの万石浦支援活動に参加、協力して下さった皆様、本当にありがとうございました。
(万石浦ライオン学校 R.K)

理事のつぶやき 朝から晩まで休みなく働き、考える暇もなく、ボロボロになりながら仕事に行く若者。借金を返すと手元に残るお金はわずか。いわゆるブラック企業から抜けられずに、もがきながら歳を重ねていく。幸せになるために働いているはずなのに…。今、目の前にいる外国籍の子どもたちが、日本でしたたかに生き抜いていくために必要な力ってなんだろう？学校が教えるべきことは何だろう？きれいごとではない現実を伝えていかなければ…。と思う。(Y.G)